

## 故郷に帰り何思う

文&写真 学生記者 森田晴香（文学部3年）

私は石川県の奥能登で育った。そして大学へ入り、ついに憧れの東京に来た。

驚かされたことがたくさんあった。例えば電車の改札だ。乗客は次々に切符を機械に入れている。「効率いいなあ。けれど改札を通るとき、よくぶつからないなあ」と感心したものだ。私の地元では、駅員さんが電車の近くに立っていて、切符を手渡しして、入退場するのである。

パスモが魔法のカードに見えた。“ピッ”と所定位置に当てるだけで、スイスイとどこへでも行ける。お金は払ってあるから別に得をしているわけでもないのに、切符を買う人を横目に誇らしげになったりもした。

コンビニのおにぎりにも驚いた。石川のものよりおいしくなく感じた。ご飯の水分が少なく、パサパサしている。勘違いかもしれないと思っていたが、東京に住む兄も同じようなことを言っていたので確実なはずだ。

東京に一人で出てきて、寂しくなることがある。感じるのは冬である。東京の雪は、降るときは1日にドバツと一気に積もるが、すぐ溶けてなくなってしまふ。

奥能登の雪景色が恋しくなる。学校へ行くときは雪に囲まれた中、野球部員が作ってくれた道を通る。家で「わー!雪や、雪や!」ときょうだいで喜んでいると、両親によく言われたものだ。「雪かきせんとダメやし、車動かんくなるし、どこがいいげんね」

晴れの日が多いという点では、東京はとて過ごしやすい。石川は雨の日のほうが多い。だから昔から、朝あまり髪をセットしないのかなと考えたが、それは天候ではなく私の性格の問題だろう。

もう東京へ来て2年半も経つので、さすがにこの土地にも慣れてきた。そんなときに奥能登へ帰ると、地元の友達に「お前も東京に染まったな

あ」とよく言われる。

自分では地元の言葉を使っているつもりなのだが、ところどころ標準語になっているらしい。なんだか不思議な感じがした。

奥能登にいたころは、東京のインタビュー映像を見て「変な話し方。なんか冷たい感じするなあ」と思っていたし、ドラマを見ては「あんなくさいセリフ、よく言えるわあ。『好きだよ』なんて、ふつう言わんやろ」と苦笑していた。

今ではそんなインタビュー映像やドラマを見ても、何の違和感も覚えなくなった。それどころか自分自身、そんな言葉を自然と使うようになっていく。昔は方言をバリバリ使っていたのに、標準語を使っている私。周囲からは「染まったな」と生意気に見えたのだろう。

「東京に染まるってなんだろう」何度も考えたことがある。今回の帰省で親戚のおじさんに、「晴香ちゃんはどこで就職するんや?」と聞かれ、「東京ですかね」と答えると、「やっぱり若いもんはこんな田舎より東京のほうがいいよなあ」と言われた。

その言葉が東京へ戻ってからも胸につかえていた。私は奥能登が、石川がもちろん大好きだし、今住んでいる東京も大好きだ。石川は私を迎え入れてくれる場所であるが、今では東京も同じようにそうである。

今まで住んできた土地に一番や二番と順位をつけることはできない。私は何にも染まっているつもりはなく、私にとって訪れた土地すべてが、大好きな故郷である。

